

会員報告 第4班 平成23年4月 2 (土) ~4月10日 (日)

○会社名 矢作建設工業株式会社 (報告会発表文から)

参加した方 (4人: 紀伊 保 後藤洋信 安藤雅之 奥村逸郎 の皆さん)

それでは、これより第4班の報告をさせていただきます。

第4班は、イチテック、オカシズ、昭和土木、矢作建設工業の4社です。

支援期間は4月2日から4月10日までの9日間。

業務内容は、イチテックと昭和土木が東松島市大曲地区にて排水ポンプ車の操作、オカシズと矢作建設工業が相馬市矢沢排水機場にて照明車及びポンプ車の操作でした。

4月2日13時に愛知県建設業協会を出発、現地集合場所である仙台市愛子防災除雪ステーションには深夜1時頃の到着となりました。

翌4月3日に国交省様よりそれぞれの現場場所を指示され、各社ごとに現場への配置となりました。

ここからは、私が配備された矢沢排水機場での報告をさせていただきます。

ここ矢沢排水機場は、福島第1原発より約32キロほどと非常に近く、放射線の影響も懸念され、放射線量測定器を携帯しての作業となりました。

現場までの移動の際に見える風景はテレビなどでの放送どおり瓦礫の山であり、大変な場所に来たなというのが実感でありました。

これが震災前の排水機場周辺写真です。この周辺は干拓地であり、地面の高さが海水とあまり変わりません。このため、ポンプにて排水するために排水機場が設けられていたが、津波により破壊され、周辺に溜まった海水が排水されないままとなっております。

これが着任時の現場状況です。排水機場屋上から陸地側を見た写真です。田畑がまるで湖のように、すべて海水に覆われています。今回の支援の一番の目的は、この海水を排水し、地面が見えるようにすることで、自衛隊がここに被災された方々のご遺体がないか捜索できるようにすることでした。

これが今回使用した排水ポンプ車です。1時間に30立方メートル排水できます。

使用する水中ポンプを設置している状況です。8インチの水中ポンプで、このポンプ車では4台使用いたします。

これが排水状況になります。この現場ではほかにも2台のポンプ車が配置されており、合わせて毎分120立方メートルの水を昼夜24時間排水していました。

田畑に溜まった海水は膨大な量で、これだけ排水しても1日に6センチほどしか水位は低下しませんでした。

それでも、当社が第5班に引き継ぎ、引き上げるまでには約半分程度の水が排水できております。

今回の支援で一番危険を感じたのが、4月7日23時32分の震度6の最大余震でした。今まで経験したことのない揺れで、立っていることができないほどでした。また、夜間警備と

して2名が従事しておりましたが、退避場所及びルートをあらかじめ決めて何度も確認していたため、問題なく高台に避難することができました。幸い津波は来ませんでした。退避に関することを徹底し、基本を守ることの重要性を強く感じました。

今回の支援業務を通じて、微力ではありますが、少しでも復興支援に携わることができてよかったと思っております。

また、捜索活動のための排水作業ではありましたが、現地で出会う方々には「ご苦労様」「ありがとう」との声をかけていただくことができました。

これからも、建設業にかかわる者として人々に感謝される仕事を行なえるよう努力したいと思っております。

○会社名 株式会社イチテック

参加した方（4人：おのでのらぶよし 小野寺信義 つじ 辻 かつなり 勝成 ふるや 古屋 むつみ 睦 ささきひでお 佐々木秀男の皆さん）

今回の震災支援活動に参加して、貴重な体験をさせて頂き、有り難うございます。

まず、3月11日の地震発生からテレビ等の報道で現地の悲惨な状況は把握していたつもりでしたが、4月3日に現地入りし、実際に被災地を目の当たりにした時、想像以上の被災状況に目を伏せたくなり声も出せずに、ただ、茫然としたことが思い出されます。

その時の感情として浮かんできたのは、杜甫の漢詩「春望」の「国破れて山河在り・・・渾て簪に勝えざらんと欲す」で、この一句のように、まったくもって、この悲惨な状況を受け止めることが出来ませんでした。

自分のそのような傷心と裏腹に、被災地の方々の力強い一生懸命な復興への姿を見て、支援活動の業務をしっかりと遂行することが自分の使命であることを自覚し、改めて気を引き締めました。

支援活動の業務内容は排水ポンプ車による冠水地域の排水作業を昼夜2交代で行いました。

排水当初、排水ポンプ車の性能が良く、想定したより水位が下がり一度は安堵しましたが、潮位の関係で大潮の満潮時に締切堰堤（仮設道路）からの漏水で一度下がった水位が戻ってしまい、凄く残念な思いをしました。

今回、最も大きな体験は、最大余震6強を体験したことです。昼勤のものは宿泊先の民宿で寝込みを襲われた感じで、大きな揺れと共に雨戸が外れ、蛍光灯が天井を叩いており逃げ出そうとしたが、立ち上がれませんでした。一方、夜勤の人たちは、排水ポンプ車や連絡車が縦揺れで車体が飛び跳ねているのを目の当たりにして、地面に座り込んだそうです。そして、揺れが収まったと同時に連絡車に飛び乗り、避難場所へ移動しながらラジオにかじりつき情報を収集し、避難所に到着しました。

なお、夜勤者の安否確認を携帯電話で何度も試みたが通じないので、直接避難場所に行つて確認しました。

また、このような場合の、連絡方法としてメールが通じることを知りました。それも離れた地域との通信が出来ることを知りました。

取り留めのない事を書きましたが、最後に一つ言えるのは、道路の大切さ、災害に強い道路網の必要性をまざまざと感じました。

この強い道路網が無いと、この度の震災支援にも参加できませんし、復興もままならないと思います。

この経験を教訓に、当地域においても危ぶまれる東南海・東海・南海大地震などに対応出来るよう、微力ながら貢献していきたいと思います。

がんばろう！！日本

○会社名 昭和土木株式会社

参加した方（ 4人：おおじてつし大路哲史 あらいじゅんざぶろう新井 順三郎 いけますひでゆき池増英幸 おおたけしげとし大竹重利の皆さん）

当社は、第4次派遣隊の一員として、平成23年4月2日から4月10日までの間、4名の社員が宮城県東松島市大曲地区で災害復旧支援業務に従事して参りました。

派遣人員が急遽2名から4名に変更になり社内総力を結集して短い準備期間の中で人選を行い、9日間の食料、水、作業用品等を1台の派遣車両（キャンピングカー）に積込み4月2日に本社から無事に送り出すことが出来ました。

当社の業務内容は、排水ポンプ車の運転・保守点検を24時間体制で行うというものであります。現場責任者の判断で昼夜2交代制をとり、昼勤班は、8：00から17：00まで勤務し、運転操作及びポンプの清掃ゴミの除去等を行うもの。夜勤班は、17：00～翌8：00まで勤務し、運転操作及び水位観測・巡回を20：00、22：00、翌3：00の計3回行うというのが詳細な業務内容でした。

参加者からの感想・意見としては、現地での移動手段がキャンピングカー1台であった為、何かと不便であった。勤務交替時の宿舎への送迎、発注者基地への打合せの為の移動等。これについては、現地でレンタカー（乗用車）を調達し対応した。人員編成については、現地での発注者との打合せ及び2交代制を考えると5人が理想的である。また、連絡手段として携帯電話のみであったが、今回の業務支援期間中、震度6弱の余震発生した後は、現場責任者と夜勤班との連絡及び本社との連絡が2時間程度取れない状態であった。やはり、衛星電話等の設備が必要であると感じました。

今回、この災害復旧支援活動に参加して当社としても、個人としても貴重な経験をさせて頂きました。社内的には、この貴重な経験を参加者個人にとどめておくことの無いようそして、次の派遣要請に応える為、しいては今後の災害復旧活動に備える為、業務支援期間中の現地からの情報を逐一全社員に広報すると共に当社の協力会社を集め災害復旧支援活動報告会を行いました。

今般、この地域においても東南海・東海・南海大地震の発生が予測されていますが、万

一の場合は、積極的に支援活動に参加したいと思います。

この度の東日本大震災による被災者の皆さまには心よりお見舞い申し上げます。また、一日も早く被災地が復興できるようお祈り申し上げます。

○会社名 株式会社オカシズ

参加した方（ 2人： ^{こばやしたつひこ}小林達彦 ^{せんだのぶお}千田信雄 の皆さん）

今回の震災で被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。

3月11日に大地震が発生して以来、テレビ等で被害の様子を見る度に何か自分に出来ることが有れば役に立ちたいと漠然とではあるが思っていました。そんな折、会社から復旧支援に行くことになった旨を聞き、真っ先に手を挙げたものの、4月2日の出発が近づくにつれ、いろいろな面で不安になりました。

いよいよ出発の日、『災害復旧活動』の幕を車に取付けると、通行人の方などから「がんばって来て下さい」と声を掛けられ大変勇気づけられました。

仙台の愛子防災除雪センターに到着後、最初の2日間は待機でした。いつ要請があっても良いように待機というのは仕方がないこととは解っていても、『復興の手助けをするために来たのにだから何かしたい』というジリジリした焦りのような気持ちでした。

やっと支援依頼がきて、向かった先は福島県相馬市の八沢排水機場でした。移動中の車窓からは、車両がひっくり返っていたり、高い建物以外は殆ど瓦礫の状態の町が見え、まるでどこかの産廃処分場に迷い込んだような恐ろしい光景でした。排水機場付近も津波により海水が入り込み、周囲の民家は壊されていて一面海かと思うような場所でした。排水機場は3階建て位の建物でしたがガラスは全部割れていて上部に流されてきた木片等が引っかかっていて不気味さを感じました。常にラジオを聴きながら作業を行い余震で津波の恐れがある時は直ぐに排水機場の屋上に避難するよう指示を受けていましたが、余震はあったものの非難するまでに至らず、幸いでした。

この場所が福島原発から30数キロしか離れていないと知り驚きましたが、それほど気にならず、海は防波堤が崩れていましたが大変穏やかで夜ともなると照明車が照らす範囲にしか光りはなく真っ暗な状態で空を見上げると星が大変きれいで昼間見た風景とは正反対でとても印象的でした。

作業は照明車の燃料補給と点検、周囲の見回りが主で、作業が進むにつれ少しずつ水位が下がり、作業している実感が湧いてきたものの、コンクリートの塊だと思っていたものが近くの流された橋であったり、車であったりして、改めて津波の恐ろしさを感じました。

このように貴重な体験をした一週間でしたが、期間中、国土交通省の支援車は設備が充実しており、車内で暖を取ったり、テレビで最新情報を得ることができとても心強く感じました。反対にトイレとゴミ処理には不便を感じました。また、作業においては先にも記述しましたが『待機』も重要なことであるため、その時間を有効的に利用すること（例えば、照明車やポンプ車の操作訓練は過去に数回受けてはいるものの車種により操作方法が

違うため、待機中に操作方法を再確認するなど）も必要であると思いました。

このような悲しい出来事は二度と起こらないよう願うのはもちろんです。しかし不幸にも発生した場合、どんな作業内容でもよいので被災した地域の人のためになる活動に是非参加をしたい。これは人間として当然の義務であるという思いを新たにしています。

(各社の活動)

